

【研究ノート】

閨怨詩の和様化

——『新撰万葉集』の漢詩を中心に——

梁 青

一 はじめに

閨怨詩とは帰らぬ夫の帰りを待ちわびる妻の情を述べる詩である。平安初頭以来この題材は非常に好まれ、嵯峨朝に編纂された勅撰漢詩集『文華秀麗集』（八一八年）では「艶情」という部が設けられ、十一首の閨怨詩が収録されている。^①これらの閨怨詩は、嵯峨天皇を核とした君臣和楽の詩宴における奉和詩であり、久しく君王の寵愛を得ずして悲しみ怨む班婕妤や、戦地にある良人のための衣を搗つ妻などが詠まれるなど、異国的な文学空間が作り上げられている。その典型的な一例を取り上げてみたい。

怨婦含情不能寐、早朝褰幌出欄楯。自言楚国名倡族、

家は宮東宋玉隣。独頼耶嬢偏愛重、何凶見者以為神。庭前見舞鸞常顧、楼上吹蕭鳳未臻。四五芳期當順礼、出從君子正為嬪。男兒好事方有□、□□從□□年。蕩子別來多歲月、那堪夜夜掩空扉。要身屢驗眞知瘦、眼險常啼謾似肥。合歡寂院寧獨忿、萱草閑堂反召悲。可妬桃花徒映鬢、生憎柳葉尚舒眉。心如煎、眼不眠。良人不意思婦引、賤妾常吟薄命篇。胸上積愁心滿百、眼中行淚且成千。君不見閨□怨□顏華、直為思君塞路遐。奈何征人大無意、一別十年音信賒。桑下受金君豈咎、機中織錦詎能嘉。羅帳空、角枕凍。角枕羅帳恨無窮。春苑看花泣長安、宵闈理線憶桑乾。類思嬾聽門前鶻、衰面慙當鏡裡鸞。願君莫學班定遠、慙々徒老白雲端。

（『文華秀麗集』艶情・五一・菅原清公・奉和春閨怨）

当詩は菅原清公が嵯峨天皇の「春閨怨」に唱和した詩で、六朝以来の詩題「春閨怨」をそのまま用いている。主人公は楚の国の有名な芸人の一族出身の、出征した夫の帰りを待ち続けている女である。春のわびしい風景を描写して閨の中の女の悲しみを引き立てながら、「宋玉の隣」「弄玉を娶った蕭史」「秋胡婦」「竇滔妻の廻文詩」「班超」など多様な典拠を駆使して、一つの美しい空想の表現世界を作り上げている。²この例に端的に示されるように、勅撰三集所収の閨怨詩はほぼ中国詩をまねたもので、その表現には作者の個性をほとんど見出すことができない。

時代は下るが、九世紀後半になると、日本漢詩は依然として中国詩に大きな影響を受けながら、在来の漢詩表現を日本の風土・社会的条件に融合させて、独自の創作を始めたのである。³その中で、寛平五年（八九三年）に成立した『新撰万葉集』の漢詩（以降、必要に応じて「本集」と略記する）は特に注目されている。⁴本集は、寛平御听后宮歌合歌を主な資料として、その左歌を上巻、右歌を下巻としている。そして、上巻は四季と恋という五つの部にわけられ、和歌ごとに七言絶句の漢詩が配されている。⁵恋部には恋歌が二十首あり、四季の部にも、後に『古今和歌集』（以下『古今集』と略記する）などでは恋に分類される歌が七首含まれている。本稿はこれらの恋歌に付された漢詩について考察するものである。泉紀子氏の調べによれば、『新撰万葉集』の恋歌に付さ

れた漢詩の多くは閨怨詩で、六朝閨怨詩（特に『玉台新詠』の表現に依拠している。⁶その他、『遊仙窟』や白居易の漢詩表現の受容などもたびたび指摘されてきた。⁷ところが、『新撰万葉集』の漢詩には、中国詩の規範を脱して日本の恋愛の様態を表現しようという傾向が見られる。また、これらの漢詩は恋歌をもとにして作られているので、和歌の内容と深く関わっており、自ずと恋歌的趣向を帯びるのである。しかし、従来の研究では、このような日本の漢詩表現はほとんど見逃されるか、あるいは単なる「和習」と認識されるにとどまり、本格的な考察はほとんどなされてこなかった。⁸

本稿は、『新撰万葉集』の恋歌に付された漢詩を取り上げ、そこに見られる日本の要素を探り、先行した恋歌との関連を考察することによって、それと中国および勅撰三集の閨怨詩との相違を明らかにし、九世紀末における王朝漢詩の展開の一端を浮き彫りにしてみたい。⁹

二 日本の恋愛表現

『新撰万葉集』の恋歌に付された漢詩には、伝統的な閨怨詩から逸脱した、平安朝の恋愛の様態を反映する表現がしばしば見られる。

(1)「蕩子」

閨怨詩においては、「蕩子」という語がよく用いられる。

蕩子行不帰、蕩子行きて帰らず

空牀難独守。空牀ひとり守ること難し

〔文選〕卷二九・古詩十九首之青青河畔草

蕩子從征久、蕩子從征して久しく

鳳樓簫管閑。鳳樓の簫管閑かなり

〔玉台新詠〕卷五・江淹・征怨

蕩子從遊宦、蕩子遊宦に從ひ

思妾守房櫳。思妾房櫳を守る

〔玉台新詠〕卷七・邵陵王綸・代秋胡婦閨怨

などはその一例である。「蕩子行不帰」について、李善注に「『列子』曰、有_レ人去_レ郷土、遊_レ於_レ四方而不_レ帰者、世謂_レ之為_レ狂蕩之人也」とあるように、「蕩子」は普通他郷に遊学して女を顧みない者、あるいは辺地に赴き帰らぬ夫を指す。前掲『文華秀麗集』「奉和春閨怨」にも「蕩子」が見える。「男兒好事・塞路・征人」などの語句と照らし合わせると、そこに詠まれた「蕩子」は出征に出かけた夫を指し、「蕩子從征久」のパターンをそのまま受け継いだことは明らかである。しかし、『新撰万葉集』漢詩に

おける「蕩子」の用い方はそれらと異なる^⑩。

上夏四一 たが里に夜離れをしてか郭公鳥ただここにしも寝

たる声する

郭公本自意浮華、郭公本自意浮華なり

四遠無棲汝最奢。四遠棲無くして汝最も奢れり

性似簫郎令女怨、性は簫郎に似て女をして怨ましめ

操如蕩子尚迷他。操は蕩子の如く尚他に迷ふ

上夏四一の和歌は、へいつたい、だれの住む里に「夜離れ」をしてやって来たのか、ほととぎすよ、ここでだけ寝ているかのよに鳴く声(がする)の意で、ほととぎすに寄せてたまに訪れた男を皮肉っている。この歌は、男が多数の恋人を持ち、男女は別々に住み、男が夜毎女性の元を訪ねていくという、平安朝の恋愛の習俗を踏まえて作られたものである。対する漢詩は、へほととぎすは、元々浮気な性格を持っている。どこにも住所を定めず、あちこちで鳴き声を響かせているおまえは、いつも自分勝手な振る舞いをする。天性は簫郎に似て、女に怨みの情を抱かせ、貞操は蕩子のようで、あちこちの女に心を迷わせている」と詠んでいる。つまり、歌の(へほととぎす―浮かれ男)の見立て表現を積極的に取り入れて、ほととぎすの飛び回る姿を、好色の男が一方

所に住み着かず、あちこちの女の元に通う様子に重ねている。

上夏四一の漢詩の結句における「蕩子」は、ところ定めずあちこち出歩いて帰らぬ夫であるという点で、「蕩子」の原義「遊於四方而不帰」と共通するが、複数の女性と付き合う「たはれを」のイメージがあり、中国詩や勅撰三集における「蕩子」と異なる側面を持っている。それに対して、中国詩の「蕩子」はほかの恋人の元に通って家に帰らないわけではなく、普通出征や遊学のため出かけるのである。ところが、もとより「蕩」という字は「たはれを」に共通するところがある。

古之狂也肆、今之狂也蕩。

古の狂や肆、今の狂や蕩なり

〔論語〕陽貨

「宛丘」、刺幽公也。淫荒昏乱、遊蕩無度焉。

「宛丘」は幽公を刺るなり。淫荒昏乱、遊蕩度なし

〔毛詩正義〕

「蕩」には、自分の思うままにふるまうという意があり、そこから女遊びに耽って品行の修まらないというイメージを連想させる。『新撰万葉集』の漢詩作者は先行した和歌の（ほととぎす―浮かれ男）という見立てを漢詩の上に表現しようとする際、「蕩」の

淫逸放縦という一側面だけに注目し、「蕩子」の本来の使い方を塗り替えて「たはれを」の意として用いている。

〔2〕「怨言」

上恋一〇二 鹿島なる筑波の山のつくづくとわが身一つに恋を積みつる

馬蹄久絶不如何、馬蹄久しく絶え如何ともせず

恋慕此山淚此河。恋慕は此の山のごとく涙は此の河のごとし

蕩客怨言常詐我、蕩客の怨言常に我を詐く

蕭君永去莫還家。蕭君永く去りて家に還ること莫し

当詩は（男の訪れは久しく途絶えてしまい、それに対してどうしようもない。私の恋しい思いは山のように募り、涙は河のように流れる。男の怨みごとは常に私を欺いて、もう家に帰ってくることはないだろう）という内容となる。「蕩客怨言」とは男の怨みごとをいう。しかし、前掲した『文華秀麗集』「奉和春閨怨」に端的に示されるように、閨怨詩では、怨んでいるのは不在の夫を待ち続けている女で、けつして男ではない。一方、男の怨みごとは恋愛初期の歌によく見られる。

あふことのなきさとしよる浪なればうらみでのみぞ立ち返りける

(古今集・卷十三・恋三・六二六・在原元方)

返事も侍らざりければ、又かさねてつかはしける

みるもなくめもなき海の磯に出でてかへるがへるもうらみつ
るかな

(後撰集・恋一・卷九・七九九・紀友則)

恋心を訴えても相手が応じてくれない場合に、男が相手のつれなさを怨んだのである。「蕩客怨言」はまさにこのような場合を指す。次に、『新撰万葉集』における「怨言」をもう一例取り上げて、女が男の怨みごとに騙されたとはどういうことなのかを説明する。

上秋七八 言の葉をたのむべしやは秋来ればいづれか色の変

はらざりける

秋来変改併依人、秋来りて変改するは人に依るを併せたり

草木荣枯此尚均。草木の荣枯此尚均し

昨日怨言今日否、昨日の怨言今日は否なり

愧来世上背吾身。愧ち来る世上の吾が身に背けることを

秋になると恋人の言葉が木の葉のように変わるといふ和歌に対

して、漢詩は棄婦の立場に立って、(秋が来て風景が変わるとともに、人に依存する状況も変わる。春が来ると草木が咲き、秋が来ると一斉に枯れるように、人の場合も同じようなものである。昨日のあの人の怨みごとは、今日は違っている。世の中が自分に背いていることを知って深く恥じている)、と男の心変わりを恨んでいる。転句「昨日怨言今日否」に詠まれた、離別後、女は男の昔の甘いささやきを思い出して棄てられた今の境遇を嘆き悲しむという発想は、中国閨怨詩に由来したと思われる。

昔我与君始相值、昔我れ君と始めて相値ふ

爾時自謂可君意。その時自ら謂ふ君が意に可なりと

結帯与我言、帯を結びて我と言ふ

死生好恶不相置。死生好恶相置かずと

(『玉台新詠』 卷九・鮑照・行路難)

托身同穴、身を托し同穴と言ふといえども

今日事乖違。今日事乖違す

(『全唐詩』張籍・離婦)

「結帯与我言」「托身言同穴」とあるように、新婚時男は永遠の愛を誓ったのである。ただし、中国詩では、昔の男の甘い言葉は「怨言」と記されないし、『論語』(憲問)の「奪伯氏駢邑三百。

飯疏食、没齒、無怨言（伯氏の駢邑三百を奪ふ。疏食を飯ひ、齒を没するまで、怨言なし）とあるように、「怨言」は本来甘言の意を持たない。一方、恋歌では、「うらむ」は逢ってくれないことに不満の意を表すだけでなく、逢瀬の実現を図ろうという意味合いで用いることが多い。

女のもとにつかはしける

わたつうみに深き心のなかりせば何かは君をうらみしもせん

（後撰集・巻九・恋一・五八四・読人不知）

とあるように、恨むのは相手を深く愛しているからである。すなわち、男の「怨言」は恋の激しさの証となり、一種の甘い言葉と見なすことができる。こうして考えてみると、「昨日怨言今日否」は、昔、男が女に求婚したとき、逢ってくれない女の冷淡を怨み、自分がいかに女を愛しているかを訴えた。女は男のその甘い言葉に惑わされて心を許した。しかし、秋になり心変わりした男からは、そういう言葉はもはや聞けない」ということになり、逢瀬以前の男女のやりとり、恋の成就と終焉がこの一句の中に詠み込まれている。こうして、「怨言」を用いることによって、平安朝の男女の交際の様子が漢詩に生かされていたのである。

三 恋歌表現の受容

『新撰万葉集』の漢詩は和歌をもとにして作られたので、その漢詩表現には多くの和歌の趣向が見られる。次に『新撰万葉集』漢詩における恋歌表現の受容について検討してみたい。

（1）忍恋の表現

上恋一〇〇 紅の色にはいでじかくれぬの下に通ひて恋は死

ぬとも

閨房怨緒惣無端、閨房の怨緒惣て端なし

万事吞心不表肝。万事心に吞みて肝を表さず

胸火燃来誰敢滅、胸火燃え来たりて誰か敢へて滅せん

紅深袖涙不応干。紅深くして袖涙応に干くべからず

〈紅花のようににはつきりと人にわかるようなことはしない、隠れ沼のように心の中で密かに思っ、そのために恋いこがれて死んでしまおうとしても〉という歌に対して、漢詩は〈閨であの人を怨み続けている。思いをすっかり心の奥にしまっ外には出さない。心の炎が燃え上がると、誰にもけっして消せない。涙に濡れ

た袖が深い紅色に染まり、きつと乾くことはないだろう」という意になる。承句「万事呑心不表肝」では、人に知られないように恋焦がれる気持ちを抑えようとする様子が描かれる。類似の例は中国詩にはほとんど見られない。ゆえに、「万事呑心不表肝」は中国閨怨詩ではなく、先行した和歌の「紅の色にはいでじかくれぬの下に通ひて」の忍恋の表現を踏まえて作られたもののだと思われる。

上恋一一四 人知れず下に流るる涙河せきとどめてむ景や見

ゆると

每宵流涙自然河、宵ごとに流るる涙自然に河たり

早旦臨如作鏡何。早旦に臨みて鏡と作さむこと如何

撫瑟沈吟無異態、瑟を撫で沈吟して異なる態無し

試追蕩客贈詞華。試みに蕩客を追ひて詞華を贈らむ

当詩の後二句「撫瑟沈吟無異態、試追蕩客贈詞華」は、(いつも通り楽器を弾いたり物思いに沈んだりして、あの人に恋文を送ってみよう)という内容である。「異態」とはいつもとは異なる様子の意である。中国詩における「異態」の例は、

則其原不可救而后徠異態。

則ち其の原は救ふことができず、后徠態は異なる

〔漢書〕杜周伝

蕩蕩乎八川分流、相背而異態。

蕩蕩乎たる八川わかれ流れて、相背いて態を異にす

〔文選〕卷八・司馬相如・上林賦

殊姿異態不可狀、殊姿異態状すべからず

忽忽轉動如有光。忽忽として轉動し光あるが如し

〔白氏文集〕〇六〇四・簡簡吟

などに見えるが、いずれも上恋一一四漢詩の場合と異なる。したがって、「無異態」は先行した上恋一一四の恋歌の「人知れず下に流るる涙河」を下敷きにして作られた表現ではないかと推測される。「下に流るる涙河」は人目をはばかって心の奥に秘めた感情を表に出さないことを、表面に現れない地下を流れる水に託して表している。和歌との対応を考えた上で、「無異態」を人目を忍んで憂い嘆く様子と解してみる。

このように見ると、上恋一〇〇の漢詩と上恋一一四の漢詩は先行した和歌を受け継いで、中国にはない日本特有の忍恋を詠んでいることがわかる。忍恋の歌は恋歌の大きなテーマの一つで、男女の恋愛関係がまだ公にされていない状態のもとに詠まれたものである。一方、中国詩には、未婚の男女の恋愛詩がきわめて少な

い。

不待父母之命、媒妁之言、鑽穴隙相窺、逾牆相從、則父母、国人皆賤之。

父母の命、媒妁の言を待たずして、穴隙を鉗つて相窺ひ、牆を逾えて相從はば、則ち父母、国人皆これを賤しまん

〔孟子〕滕文公章句下

とあるように、媒酌人の仲介や家父長の決定に従って男女が結婚するのであって、未婚男女の自由な付き合いは許されない。このような社会的規範があるからこそ、中国では結婚前の恋愛を扱った文学がなかなか生まれてこない。前掲した菅原清公「奉和春閨怨」の「四五芳期当順礼、出従君子正為嬪」では、女が礼に則つて男の家に嫁いだ場面が描かれる。結婚前の男女の交際でなく結婚後の夫との別離の悲しみを詠んでいるのは、中国詩の伝統用法をそのまま踏まえているからである。なお、『新撰万葉集』以外の王朝漢詩には、忍恋に関する表現はほとんど見られない。そこに和歌を前提にして作られた本集漢詩の特殊性がある。

(2) 恋の終焉における女の心情表現

前に述べたように、古代中国では、未婚男女の自由恋愛は許さ

れないので、それに相応する恋情表現も少ない。待つ女や棄婦を詠んだ漢詩こそが閨怨詩の主流である。一方、日本でも、待つ女・捨てられた女の恋歌は万葉集以来数多く詠まれており、閨怨詩と類似した発想様式を持っている。こうした抒情様式の類同性に基づいているからこそ、『新撰万葉集』の恋歌から閨怨詩への翻案は比較的容易に実現できたのである。

上恋一〇九 厭はれて今は限りとなりにしを更に昔の恋ひら
るるかな

被厭蕭郎永守貞、蕭郎に厭はれて永く貞を守る

独居独寝涙零零、独居独寝涙零零たり

心中昔事雖忘却、心中昔事忘却すと雖も

願念閨房恩愛情、願念す閨房恩愛の情

〈あの人に嫌われて、二人の仲は今もう終わった、いまさらながら昔を懐かしく思うよ〉という歌に対して、漢詩は〈あの人に厭われたとしても、ずっと貞節を守っている。独り寂しく過ごして、一人で寂しく寝ていると、涙が流れてくる。昔のことは忘れてしまったが、かつての二人の恋愛を今また思い出した〉となっている。当詩は、破局を迎えた現在を仲睦まじく過ごした昔と対照させることによって、時とともに移ろう恋情のはかなさや、恋

を失った我が身の孤独を表す。ここに詠まれた（昔）閨房恩愛情―（今）被厭蕭郎・独居独寝」という対照表現は、

玉顔隨年變、玉顔年にしたがって變ず

丈夫多好新。丈夫多く新を好む

昔為形与影、昔は形と影となる

今為胡与秦。今は胡と秦となる

胡秦時相見、胡秦は時に相見る

一絶踰参辰。一絶参辰に踰ゆ

〔玉台新詠〕卷二・傅玄・苦相篇豫章行

与君初婚時、君と初めて婚せし時

結髮恩義深。結髮恩義深し……

行年将晚暮、行年将に晩暮ならんとし

佳人懷異心。佳人異心を懐く

恩絶曠不接、恩絶えて曠しく接せず

我情遂抑沈。我が情遂に抑沈す

〔玉台新詠〕卷二・曹植・種葛篇

とあるように、中国の棄婦詩の随所に見られる。仲睦まじく過ぎ去った昔と忘れ去られた今とが対照をなす点において、上恋一〇九の漢詩に通じる。しかし、中国閨怨詩では、現在の状況を昔と対

照させることによつて、女が盛りを過ぎて捨てられた悲劇性がよりいっそう切実に表現されている。右の二例で一番強調される点はやはり今の不幸な境遇にある。あるいは「托身言同穴」、今日事乖違。……昔日初為婦、當君貧賤時。晝夜常紡績、不得三事蛾眉。辛勤積黃金、濟君寒与饑」（『全唐詩』張籍・離婦）のように、昔、嫁として勤勉に働いて貧乏な家を少しづつ豊かにしたが、結局捨てられ、悲惨な結末を迎えてしまったことを述べることで、今と昔とを鮮明に対比している。また、中国の棄婦詩においては、女が激しい怒りを抱いて男の背信を非難する表現がかなり多い。

悦新昏而忘妾、哀愛惠之中零。遂摧頹而失望、退幽屏於下庭。痛一旦而見棄、心怛以悲驚。衣入門之初服、背床室而出征。攀僕禦而登車、左右悲而失聲。嗟冤結、而無訴、乃愁苦以長窮。恨無愆而見棄、悼君施之不終。

〔芸文類聚〕卷三十・人部十四・別下・魏・曹植・出婦賦

上恋一〇九の漢詩と比べて、「出婦賦」の「哀・摧頹而失望・痛心怛以悲驚・嗟冤結而無訴・愁苦・恨・悼」という語句から読み取れる棄婦の怒りや悲痛の度合いははるかに高い。なぜなら、女性は夫に捨てられたら、社会や家族から白眼視され、再婚も困

難なので、「今日妾辞_レ君、辞_レ君欲_レ何去」。本家零落尽、慟哭来時路」（唐・李白・去婦詞）と言われるように、行き場もなくなつてしまふ恐れがあるからである。それゆえ、棄婦は夫の変心を厳しく詰問し、強く憤懣をぶつけるのである。¹⁸⁾

それに対して、上恋一〇九では、恋の終末期に、仲睦まじく過ぎた昔の時間は二度と戻らないことを嘆いているが、今と昔との境遇の差を際立たせて相手の変心を激しく非難することではなく、ただ「願念閨房恩愛情」には断ちがたい未練のみが読み取れる。

本集上恋一一の漢詩の「恨来相别抛_レ恩情……時時引_レ望望_二荒庭_一」からも明らかのように、男はもう二度と訪ねてこないのに、女は依然として男を恋慕いつつ逢瀬を期待している。平安朝では、男の訪問が一度途絶えてしまつても、しばらく経つてはかの女との仲が冷めると、またもとの恋人のところに戻る場合は珍しくないし、男が訪ねて来なければ、女は新しい相手を見つけることもできる。また、女の生活の拠点は生家にあり、夫が離れたことによつて生活の拠点が奪われることもないので、行くあてのない悲惨な境遇までには至らない。¹⁹⁾そのため、女は男から疎まれたとしても昔の愛情を振り返つて恋しく思うことができるのである。

「心中昔事雖忘却、願念閨房恩愛情」は先行した上恋一〇九の恋歌「厭はれて今は限りとなりにしを更に昔の恋ひらるるかな」から直接影響を受けているが、この発想は『万葉集』から『古今

集』にかけての恋歌に広く見られる。

よしゑやし恋ひじとすれど秋風の寒く吹く夜は君をしそ思ふ

（万葉集・卷十二・三〇一・寄夜・作者未詳）

つれなきを今は恋ひじと思へども心よはくも落つる涙か

（新撰万葉集・上恋・一一三・菅野忠臣）

忘れなむと思ふ心のつくからにありしよりけにまづぞ恋しき

（古今集・卷十四・恋四・七一八・読人不知）

右に見てきたように、上恋一〇九の恋歌は万葉歌との連続性を有する。もはや恋しいなどとは思われないが心弱くて涙を流した、忘れたいのにいっそう恋しさを募らせる、という屈折した恋情表現は上恋一〇九の漢詩に取り入れている。なお、前掲『文華秀麗集』「奉和春閨怨」における思婦の心情表現はただ「恨・怨・心焦・愁」などの語にとどまるが、上恋一〇九の漢詩は恋歌の表現を受容したことで、より複雑で繊細な心情表現「心中昔事雖忘却、願念閨房恩愛情」が作り出されている。

四 おわりに

平安初頭の勅撰三集の漢詩は、ほとんど中国詩の用法に準じて

作詩されている。九世紀末、国風意識の高まりに伴って、王朝漢詩は中国詩の模倣と追隨にとどまらず、日本の生活や感情を表現して新たな展開を見せた。『新撰万葉集』の漢詩に多く描かれたのは、見たこともない長安の美女の閑怨ではなく、平安朝を舞台にした男女の恋である。また、心の中で恋焦がれても人に知られないように恋心を抑えたり、相手を忘れようとしてかえって恋しさを募らせたという緻密な心理描写は、中国詩や前代の日本閑怨詩にはほとんど見えず、恋歌の世界を強く志向した結果である。生硬な模倣的習作が多い前代の日本漢詩と比べて、『新撰万葉集』の漢詩の日本的展開は王朝漢詩の成熟を物語り、国風文化成立の前兆と見ることができる。

注

- (1) 『文華秀麗集』艶情部の次の楽府部における漢詩もほとんど閑怨詩である。なお、先行した中国の総集や類書などには「艶情」という部類は見えない。
- (2) 小島憲之「漢風讚美時代」「古今集以前」（塙選書、一九七六年、二二七頁）参照。
- (3) 高兵兵「菅原道真の（贈物詩）をめぐって」（『中古文学』七八、二〇〇六年）など参照。
- (4) 『新撰万葉集』の本文と番号は『新撰万葉集注釈』（新撰万葉集研究会編、和泉書院、二〇〇五年）による。本集漢詩の解釈については、本稿は『新

撰万葉集注釈』と『新撰万葉集』注釈稿（注（14）に負うところが大きい。また、『玉台新詠』『孟子』『論語』『文選』『白氏文集』の本文と訓読は『新釈漢文大系』（明治書院）、『文華秀麗集』『万葉集』『古今集』の引用は『日本古典文学大系』（岩波書店）による。他の引用和歌は『新編国歌大観』（角川書店）に従った。なお、一部表記などを改めた部分がある。

(5) 本集は上下二巻があるが、下巻に漢詩を載せていない伝本（原撰本）があるので、本稿は上巻のみを考察の対象とする。

(6) 泉紀子「新撰万葉集における漢詩と和歌」『大阪女子大文学国文』三二、一九八一年、六三、六六頁。ほかには、山口博「閑怨の詩人小野小町」（三省堂選書、一九七九年、一六九、一八七頁）で、本集漢詩に詠まれた「夢」「蜘蛛」の六朝閑怨詩の受容を論じた。また、中野方子氏は「平安前期歌語の和漢比較文学的研究」第二節「秋閑怨の受容——『新撰万葉集』から『古今集』へ」（笠間書院、二〇〇五年、六九頁）で、本集漢詩に詠まれた「虫」「涙」「華顔衰残」は閑怨詩の型を踏まえているという。

(7) 新間一美氏は「新撰万葉集」の成立と意義」（『国文学——解釈と鑑賞』七六（八）、二〇一一年、四三頁）で本集漢詩の『遊仙窟』の受容について言及した。また、本集恋部漢詩が白居易の漢詩に影響を受けたことは、小島憲之「恋歌と恋詩——万葉・古今を中心として」（『文学』四四（三）、一九七六年、三〇四—三〇五頁）をはじめ、津田潔「『新撰万葉集』上巻・恋歌における白詩の受容について」（『白居易研究年報』、二〇〇〇年）など先学の指摘するところである。

(8) 小島憲之氏は「九世紀の歌と詩——『新撰万葉集』を中心として」（『関西大学国文学会「国文学」五二、一九七五年、四二頁）で、『新撰万葉集』の漢詩を歌意に接近させようとするならば、詩は和習味を帯びることになるという。また、大戸温子氏は「新撰万葉集——「恋」をテーマにし

た日本漢詩」(『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書」平成二十一年度海外教育派遣事業編、一九九〇二〇一頁)で、本集恋部の漢詩における中国詩にない表現を羅列してそれを和習と判断した。しかし、本集漢詩の和化表現の生成過程や和歌との関係についての考察はほとんどなされていない。

- (9) 本集漢詩の成立時期を考えた上、本稿では唐代までの漢詩文を対象とする。

- (10) 『新撰万葉集注釈』(四二頁)で「蕩子賦」の「蕩子」が出征した兵士であるのに対し、本詩「筆者注、上秋四七の漢詩」の「蕩子」が、浮かれ男である点は相違する」と指摘したが、その原因については触れていない。なお、本集上秋四七の漢詩の「蕩子、従来無定意、未嘗古有得羅敷」における「蕩子」の使い方は漢詩八二に近い。

- (11) 当歌は夏の部の歌であるが、『古今集』の恋部(巻十四・恋四・七一〇・読人不知)に収載されている。

- (12) 小島憲之氏は『古今集以前』(塙書房、一九七六年、二九二―二九四頁)において、伝説の「簫史」からややくだけた俗語的な「簫郎」が生まれ、これが男子の通称として通用するようになるが、本集の漢詩では「蕩子」を指すものと見るべきだと述べた。

- (13) 当詩における「簫君」と「蕩子」は、同一人物を指す。

- (14) 半沢幹一・津田潔氏は『新撰万葉集』注釈稿(上巻秋部七五―七八)(共立女子大学文芸学部紀要五三、二〇〇七年、五二頁)で、漢詩文における「怨言」は男女間のニュアンスを含まないが、和語「うらみごと」は特に男女間のことを言う場合があると指摘した。

- (15) 『新撰万葉集注釈』(二六二頁)では、「怨言」を「私がかんなに愛しているのにあなたはつれない」と解した。本稿では、この理解に従いたい。
- (16) 『新撰万葉集注釈』(五一―四頁)の語釈では、上恋一一四の「異態」を「いとものは異なつた態度や様子の意」としているが、通釈では一句を「瑟

を弾き静かに歌を歌うばかりで、他にすることはない」と解しており、「異態」の意味については、意見が分かれている。

- (17) 中国に真の意味での恋愛詩がほとんどない理由について、天野紀希子氏は「閨怨詩に代る「禁忌の恋」の発見」(『日本文学誌要』五四、一九九六年、三頁)で「男女が歌い交す文芸の形式を持っていなかったことに関わる」という。そして、日本文学の恋愛重視の文学観と違つて、中国文学は恋愛を軽視する傾向があり、政治を批判し志を述べる詩こそが正統な文学であり、また恋歌は日常生活の中で男女の愛情交流の手段として働いているのに対して、中国閨怨詩は男性詩人が閨の中の女の立場に立つて詠んだものが多いと思われる。

- (18) 孫久富『日本上代の恋愛と中国古典』第二部第四章『詩経』の相怨詩と『万葉集』の怨恨歌——文学主題の比較(『新典社』一九九六年)参照。

- (19) 胡潔「婚姻習俗と文学——「恋」の諸相の底流にあるもの」(『国際シンポジウム「異文化としての日本」記念論文集』、名古屋大学大学院国際言語文化研究、二〇〇九年、一四七頁)参照。

付記

本稿は、第一二三回表現学会東京例会(於共立女子大学、二〇一二年十一月十日)での研究発表に加筆修正したものです。ご質問ご助言くださった方々に記して心より感謝申し上げます。